

# 老舍『牛天賜伝』試論

渡 辺 武 秀\*

## On Lao shê (老舍)'s "Niu T'ien Tz'ŭ Chuan (牛天賜伝)"

Takehide WATANABE\*

### 概論

老舍の長篇小説『牛天賜伝』最初发表在一九三四年九月到一九三五年十月の半月刊杂志《论语》上。《论语》以刊登幽默作品而著称，因此被人们称为“幽默杂志”。老舍の『牛天賜伝』也不例外。我们一看就明白这篇小说里面有很多让读者“哈哈大笑”的地方。这就是这篇小说的特点。

这篇小说描写的是主人公牛天賜二十年的成长过程。大体可以分成两大部分。前半部主要描写牛太太抚养天賜的场面。后半部写的是天賜上小学以后的事情。前半部的“可笑”是由牛太太抚养天賜的方针、方法而引起的。她是个“好人”，为了天賜将来能有出息，她费尽了心血。但是，适得其反。她的做法好像是在虐待天賜一样。甚至差点儿丢了天賜的性命。这个结果当然她自己也没想到。后半部的“可笑”是由天賜的“想像”引起的。他凭“想像”看事物，进而又凭“想像”做事。就好像玩耍一样。那么天賜是如此“可笑”的人吗？不，应该说是他的所作所为让人们觉得“可笑”。而不是他人本身“可笑”。另一方面，“想像”有时也有意义。“想像”有时能发挥作用。比如，在做诗写文章的时候。作者特意插入天賜写的文章在报纸文艺栏里被刊登的事。这些都是使读者不由的“哈哈大笑”的老舍的特有的写作手法。

**Keywords:** humor, laugh, imagine

### はじめに

この『牛天賜伝』は1934年9月から1935年10月まで『論語』という雑誌に連載されている<sup>(註1)</sup>。『論語』は林語堂が主宰したもので、彼はこの雑誌で「ユーモア」を提唱し、中国に「ユーモア」を取り入れようとした<sup>(註2)</sup>。このため、この雑誌は「ユーモア雑誌」と称され、さまざまなジャンルの「ユーモア作品」がこの雑誌に掲載された。老舍が長編小説『牛天賜伝』を発表したのはまさしくこのような雑誌であったのである。このためこの作品を書くに当たり老舍自らも「ユーモア」を強く意識していたし、自ら考えていた「ユーモア」を作品に持ち込もうと意図していた。このことが次の引用文の中に窺うことができる。

この引用文で作者はこの長編小説『牛天賜伝』は失敗作であるとし、さらに「ユーモア」の問題に触れ以下のように続ける。

この他にさらにこの作品を出来の悪いものにした原因がある。その第一は文字における制限である。この作品が『論語』半月刊の特約長編であった。だから幾らかユーモアであらねばならなかった。もちろんユーモアと偉大とは相容れないことはないし、私は必ずしもユーモアのために不安を感じることはない。『ドンキーホーテ先生伝』などの名著は中文に翻訳されても決して何ら「打倒」を招くこともないだろう。私の困難は每期ただ四五千字のみを求められていたのに、ストーリーのつながりに気を配らなければならないばかりか、さらには所々で軽く笑わせねばならなかったことにある。この目的を達成するため、私はユーモアを死んでも離さないという気持ちを抱くより

平成9年10月15日受理

\* 総合教育センター・助教授

仕方なかった。言うまでもなく、死んでもユーモアを離さないという態度であれば必ずユーモアを失うときが来るし、ましてユーモアを量り売りするような態度では必ず嫌われることになる。私の困難はこうしてこの作品の欠点になってしまった。そもそも芸術作品は姑息な手段で読者を引きつけようとするのを最も嫌う。故意に笑わせることは病でもないのでに呻吟する罪状と、もともと一緒である。<sup>(133)</sup>

この作者の言葉が作品の評価に影響を与えているのだろうか、この『牛天賜伝』は、高い評価を受けている『離婚』の後、代表作といわれる『駱駝祥子』の前に位置する長篇作品でありながら、これまでほとんど注目されてこなかったように見える。そのため、当時の人々には好意を持って迎えられた<sup>(134)</sup>にもかかわらず、この作品について論じられることが少なく、作者の意図もまだ十分解明されていないように思われる。

作者の言及からも既に明らかのように、この作品は「ユーモア作品」の中に入れて良いと思われるし、実際この作品には読んで思わず「笑ってしまう」「笑わせられる」部分があることにすぐ気づく。このように作者が「笑い」を使って表現しているのであれば、作者がこの作品で行った試み、作品の狙いなどを明らかにするには、その「笑い」に注目するのが自然であると考え。いや寧ろ「笑い」を抜きにしてこの作品の解釈は行えないのではないか。だが、「笑い」そのものを解明するのは容易ではない。そこで、老舎の「笑い」そのものの正体を解明できなくとも「作品全体のストーリーの展開の中のどの部分にユーモラスな表現があり、それがストーリーの展開でどのような効果を上げているか考えることによって、『ユーモア』という言葉で象徴的に示されている老舎文学の特徴に触れられるのではないか」<sup>(135)</sup> という方向で、この作品を考えてみたいのである。

こうすることで、本当にこの種の「笑い」は、

老舎自身が言うように、読者を笑わせるためだけにあり、本当に意味のないものであるのか。もし意味があるとすれば、作者は「笑い」を使って何を表現しようとしたのか。或いは「笑い」でしか表現できないもの、そんなものを表現しようとしたのではなかったのか。また或いは作者が「笑い」に乗せて何らかのメッセージを送ろうとしているのではないのか。このようなことも幾らか明らかにすることができるようになる。ともあれ老舎が真意をストレートに語らない「ユーモア作家」であるなどから考えても、作者の、その言葉をそのまま受け取るのは余りにも「ユーモア」がなさすぎる。

この小説は、主人公の牛天賜の二十歳までの成長の物語である。

天賜は牛家の本当の子供ではない。牛家の家の前に捨てられていた子供である。それをたまたま落花生売りの胡さんが見つけ、牛家の、子供のいない老夫婦のところに持ち込んだ。やがて夫婦は自分の子供として育てる決心をし、この子を天賜と名付ける。この命名からも分かるように、この夫婦は天から授かった子供として育てるというのである。以後、彼らが乳母を探して、育て始めるところから、二〇歳になるまでが、各時期におけるエピソードを連ねながら描かれていく。

さて、この物語は、大きく二つに分けることができると思う。<sup>(136)</sup>

前半部は牛家の奥さんによる子育てというものを中心とした物語の展開であり、後半部は天賜が牛家の奥さんの支配から幾らか自由になって自分で行動していくことになる部分である。そして物語をこのように分けた場合、前半部は牛家の奥さんが、後半部は天賜が物語の中心となる。

では、まず前半部から考えていく。

## 1) 前半部

### 《母親の世界》

前半の部分は、天賜が牛家の子供となり、乳母探しから始められる。それも牛家の主人が知り合いの人に頼んで、どうにか探し出すことができた。そうして乳母の件が落着くとすぐに「洗三」という儀式も執り行われる。「洗三」は親戚、知人へのお披露目の儀式である。こうして天賜は対外的にも牛家の一員と見なされることになる。

このようにストーリーは始まっていくのだが、まず牛家の奥さんが天賜をどのように育てようとしているのかから見ていくことにする。牛家の主人は商人であるが、奥さんはむしろ自分の父が役人であったことから「役人的」を理想としている。奥さんは商人の妻になったのは不本意なのである。

彼女の実家は役人の家だった。彼女は字は知らないけれど、役人くさはあった。彼女はどんなふうに使役を使うか、どんなふうに見栄を張るか、どんなふうにもったいぶるかといったことを心得ていた。彼は何にも分からなかった。だから、役人の実家の父が死んだのならともかく、もしそうでなければ、実家に帰るなんてとんでもない。ジャガイモの夫を連れて役人の父に会うってことなんてできない。そんなことしたら全くの恥さらしだ！そもそもこの縁談がどうして起こったのか？彼女はいつも不思議でならなかった。/彼女は役人タイプの子供を強く望んでいた。夫の財力、自分の理想をもってすれば、必ず立派な子供を育てることができる。しかし夫は子供を得ようという気概さえもなかった。彼は早くから妾をもらおうと思っていた。彼女がいたので、早い時期にこんなことを考えるのをやめた。彼女は子供を生まなかったの、誰も一方のみに責任をかぶせることはしなかった。子供を養子にして、もやもやしたもの、吹き飛ばしたいなら、方法はあった。でも、夫は牛家の子供が欲しかったし、彼女の実家の子供が欲しかった。彼女の希望を少し我

慢するかわり、夫の自由選択を許さず、ひとまず子供をもらわない方がよいというふうになった。天賜の出現はこの困難さを解決した。彼はまるで牛家のために生まれたようなものだった。牛の奥さんは彼を抱き上げるなり、決めた、この子で役人ふうの子供に育てる試みをしてみよう。(註7)

自分の実家の親戚から養子をお願いしたいのだが、それは主人の一族の養子を拒否する手前できない。そこで自分の親戚を主張しない代わりに、タイミング良く出現した、捨て子である天賜を自分の子供として、役人に育てよう考えるのである。言うまでもなく、役人とは社会のエリートであり、伝統文化の担い手でもある。役人にするためには、それなりのエリート教育をする必要がある。

これ以後、牛家の奥さんは天賜を「役人になれる」ような立派な子供にするため、いろいろ試みることになる。

見た目が良いということも役人の条件である。天賜の足が「がに股」になっているのを見て、彼の足は紐で強く縛られることになる。子供は生まれたときには、いくらか「がに股」になっているものであるが、それを知らない牛家の奥さんは「がに股」を治すために足を縛ってしまったのである。

彼の足はみなしっかりと縛られ、少しも動くことが出来なかった。まるで包帯で巻かれている兵隊の大腿部のようにであった。牛奥さんの善意であった。ただ彼ががに股になるのを恐れたのである。後に、天賜の膝はねじれてしまい、足の先はお互いにもつれ合い、永遠に三分以内で百メートルを走り終ることができなくなった。このことは、牛奥さんが予想しなかったことである。思想のない善意はビッコを生み出すことになる。(註8)

ここで書かれているように、このような処置を施したのは、牛家の奥さんの善意からである。このことを作者が強調していることに注目した

い。牛家の奥さんは決して悪気はないである。あくまで良かれと思って行っている。

このようなことをされるのであるから、天賜は当然嫌がるし苦しがる。しかし、子供であるが故にそれを言葉で訴えることは出来ない。

手足をすでに動かすことができないのだから、泣き叫ぶ運動で内部を運動させるしかなかった。しかし、これもだめだった。彼が泣き声をあげるたびに、たちどころに乳首が彼の口をふさいだ。ストレスのたまった豚のような泣き叫びからウンウンに改めるよりほかになかった。第一、子供は泣くべきではない。第二、紀媽の乳は貯めておくべからず。奥さんは損得をはっきり見て取ることができた。もし子供が思うままに泣くなら、これは子供の力を無駄に使うものであり、また紀媽の乳を節約するのは、どんな経済理論に照らしても、正しくはない。奥さんは赤ん坊はそれ相応な時期に泣くものであることは知っているかのようであったが、紀媽の乳と給料に思い至るや、思わず叫ぶのである「紀媽、赤ん坊がまた欲しがっているよ！」お金は喋れないが、人に話させるのである。このことで牛の奥さんを恨んではいけな<sup>(注9)</sup>い。

ここは悲惨であるけれど、思わず笑ってしまう。実は赤ん坊が泣いている意味が、牛家の奥さんに間違っ<sup>(注10)</sup>て取られている。いうまでもなく赤ん坊は痛がって泣いているのであり、苦しんでいるのである。にもかかわらず奥さんの方はその泣き声の意味を、お腹をすかしているものと勘違いしている。だからただちに乳母が呼ばれ、たちどころに乳母の乳房が天賜の口をふさぐ。この赤ん坊が泣いている意味の取り違え、その展開が可笑しいのである。

そして六ヶ月後、天賜の足は見事に変形してしまう。

ともかく、天賜の身体<sup>(注11)</sup>の、足を縛った縄は解かれ、足の部分が二股になってないズボンは換えられた。紀媽は六ヶ月の間、縄で縛ったのは確かに

効果があり、もう絶対にがに股になることはないことを知った。というのは足の先はすでに内側に曲がっていたからである。今回は彼女は機転を利かせて、奥さんには報告しなかった。このおかげで幸いに助かった。そうでなければ、天賜はおそらく又縛られることになっただろう。<sup>(注10)</sup>

この作品における「笑い」は牛家の奥さんを「悪い人」にしないようにするところで使われている。もしこの牛家の奥さんが残酷な「悪い人」であればこの作品は子供を自分の玩具のように扱う、単なる子供虐待の物語で終わる。作者は明らかにそのような物語にしたいのではないのである。あくまで牛家の奥さんは決して悪い人ではない。むしろいい人なのである。足を縛ったのは、決して天賜を憎んでいたからでもなく、故意に身体に障害を与えようと思ったのでもない。このようにしたのは、いづらか自分の価値観を押しつけてはいるが、あくまで天賜のために「良かれ」と願ってのことである。天賜が見た目にも立派な人物になって欲しいからこうしたのである。にもかかわらず、この願いが、結果的には、皮肉にも子供の自然な成長を歪め、子供を身体障害者にしてしまうのである。

この、牛奥さんが天賜の「足を縛り付ける」という行為から、かつて中国で幼い女の子に施していた「纏足」を自然に連想させられる。親が子供によかれと思ってやったことが却って一生の苦しみを与えることになることがある、という事実である。このような、いわば無意識の、或いは無邪気な、しかしながら残酷な親の行為というものが「笑い」という手法で描き出されている。

「笑い」そのものは牛奥さんが赤ん坊の、苦痛からの泣き声の意味を取り違えることや、作者が故意に牛奥さんの擁護の側に回ること<sup>(注12)</sup>で起こる。その「笑い」は単純に読者を「笑わせるため」のもののように見せながら、実は牛奥さんを「善人」するために使われている。その結果牛奥さんの行為、言動はすべて、「悪意」ではな

くむしろ「善意」に基づいて無邪気にやっていることになる。では、どのような意図で「笑い」を使ってこのような展開にしたのか。それは、作者はその虐待という事実そのものより、寧ろその背後に潜んでいるもの、何故このような行為が容易に起こり、なくならないのかといったところ、そのメカニズムのようなものを描き出したいからであろう。だとすれば、この小説は、纏足というようなものが何故長い間中国に存在し、無くならなかったのかの理由の一つを、人間の心理との関係から解明していることになるのではないか。このようなデリケートな局面の描写、それからもたらされる微妙なメッセージは「笑い」なしでは考えられないのではないか。<sup>(註11)</sup>

さらに次の「種痘」の場面もこの種の「笑い」を伴う場面である。

奥さんはいい加減にすることは絶対に出来なかった。だだ心に恥じるようなことがないように、すべきことはやはりちゃんとやらなければならない。天賜は種痘をしなければならないのだ。奥さんは自ら出馬して調査に行った。無料で種痘をしてくれるところは大変多い。天賜は当然このようなところに行くことは出来ない。身分が違う。金を払って種痘をするところも少なくはない。しかしそこは大体二派に分かれている。一つは洋式であり、ただ一つだけ、しかも必ずしも腕にするのではなく、大腿部でも良かった。もう一つは旧式で、左右の腕にそれぞれ三つずつ、値引きなしで、しかも種痘をするとき医者の手は絶えず震えている。彼女は天賜を抱いて、震える医者の方へ行くことに決めた。理由は震えがひどければ、六つやるべきところを七つか八つすることになるかもしれないからだ。種痘は多ければ多いほどよいではないか？！<sup>(註12)</sup>

この場面ではまず当時の中国の医療現場が諷刺されている。そして、この中の、最も危険な選択を、牛家の奥さんが「善意」から、さらに

は損得勘定から行ってしまったのである。こうして天賜は旧式の医者のところ連れて行かれる。つまり親の「善意」、多ければ多いほど良いだろうという親の考えによって子供は死の苦しみを受けることになったとでもいえるだろう。

六つもやったのだから、泣かないならどうするんだ？ひとしきり泣き続け、唇はゴムのように、軟らかくなりよく動いた。目の中に本当に涙が落ち、あるものは鼻の方に流れ、あるものは目の端にたまった、さらにあるものは額の方に二三滴落ちた。子供用の虎の形をした靴は一足は足をばたつかせて脱げ、頭の上で結ばれていた弁髪もリボンと関係無くしていた。扁平の髪のない頭はまるで小さなザクロのように赤い汗の粒が掛かっていた。全体から見れば、すっかり大敗して帰るという有様だった。牛奥さんはもし扇子の骨が惜しくなかったら、ほんとうにひとしきり叩こうと思った。うまい具合に医者には、六つちゃんとしなくともかまわないと決定した。しかし牛奥さんは約束と違うので、六つでなければ一元払わない、一つ少なくしたら一角五分値切るとした。そこで天賜はひきつけデモをしなければならないと感じた。ちょうど白目になろうとしたとき、六つ終わった。が、最もショッキングな悲劇には成らなかったようだ。<sup>(註13)</sup>

天賜は危うく死にそうになる。もちろん牛家の奥さんはそのことに気づいていない。天賜を死なせてしまうような危険な目に遭わせることに「悪気」はない。あくまで「善意」なのである。しかも「善意」に基づく行為を受け入れないと思うから、牛奥さんは腹をさえ立てるのである。前半はこのような展開が中心になっている。

余りに自明なことであるが、ある程度の年齢に達するまでは赤ん坊は言葉を発して自分の要求を訴えることは出来ない。しかしややもすると親は自分の赤ん坊のことを何でも知っているような気持ちになり、自分の価値観を赤ん坊に押しつけてはいないだろうか。この結果、幾ら

か誇張されて描き出されてはいるが、誤った自分の価値観によってこの小説のように子供を奇形にしたり、果ては殺してしまいそうになることがあるかも知れない。よくよく考えると、実はこのようなことがおこる可能性は時代、社会を越えて、親である誰もが持っているものであり、或いは人間の一つの弱点と考えてもよいように思う。

以上から窺えるように、牛家の奥さんの育て方、その方針は、子供の肉体、精神の発達を自然に任せるのではなく、子供の発達過程に、大人の価値観に基づき、多く手を加えることで、無理矢理、自分の考える理想的な方向に持っていくとするものといえる。

### 《父親の世界》

もちろん母親だけが天賜に接しているわけでもなく、いつまでもなすがままにされているわけではない。その反対の極、対照的な位置に牛家の主人の世界が描かれている。牛家の旦那は自由放任の世界で天賜が一番喜ぶようなことをさせてくれる。以下はそのような場面である。

父親が友達のお祝いやお悔やみに行くのは、ただ食べに行くのである。途中で親子は相談した。お前は丸子を食べるのが好き、そうだろう？ そうかい、じゃ幾つか多く挟んであげよう。食べ終わったら何処へ行く？ 城外に遊びに行くかい？ それとも黒さんの乾燥果物屋さんに行くかい？ もし黒さんのところに行くことになったら、お父さんは昼寝が出来たし、天賜は勝手に干しぶどう、棗の砂糖漬けを食べられたし、店員のものたちがみな彼と一緒に遊んでくれた。カウンターの中で目隠し鬼ごっこをしたり、高い高いをしてくれたり、紙巻きタバコの絵を賭けたりした。男たちはあれやこれや尋ねなかった。まして黒さんにはさらに一群の子供たちがいた。この子どもたちで道を歩けるものはみなほとんど家にはいなかった。だが、彼らが家にいるときに行き当たれば、そのおもしろさはほとんど一度皇帝になるのと同じぐらいだった。この子どもたちは永遠に上

着を着ず、足はいつも裸足で、しかも経験は非常に豊富だった。男も女も同じだった。みんな城外のすべての河や堀に何がいるか知っていたし、みなどのように雀を捕まえるか、トンボ取り、手長エビを掬い、蛙を釣り、コオロギを捕まえるか……を修得していた。彼らの顔、首、背中にはみな黒光りしていた。泥が着いていても拭かず、泥が自分で落ちるままにするか、或いは汗で流れ落ちた。<sup>(註14)</sup>

牛家の奥さんの対極に牛家の主人の「何でも許してくれる」世界があり、その牛家の主人の延長線上に天賜が憧れる、子供たちの、さらに自由な世界がある。その自由な世界はまさしく自然の中で、自然の動物たちと遊びながら生きる、そんな世界である。それは母親から見れば、行儀が悪いとか、汚いと言われる世界ということになる。それ故、この種の自由な世界への憧れは、母親の世界への反抗、それらの衝突となって表れることになる。

例えば、靴下をきちんと穿くというのは中国の上流社会では重要な礼儀であるが、父親の友人の黒さんところの子供の影響から天賜は故意に靴下を穿かなかったりする。すると、この様子を見た母親は、天賜が外に出ることを禁止する。変な子供たちと接触したから天賜が悪くなってしまったと考え、その種の子供たちと一緒に遊ばせないことで、天賜を良い子のままにしようとするのである。だが、果たしてこのような方法でうまく行くのか。この小説でも、たとえこのような方法を採用しても、やはり天賜は、母親の価値基準からすれば「悪く」なっていく形になっている。ここに子供はそもそも親の考えているとおりに行動してくれないし、思った通りに育ってくれない事実を描き出していると捉えても良いだろう。ではどうすればいいのか。恐らくきっぱりとした答えは出せない。或いは、ここには社会を越えて、時代を超えて存在し続ける永遠の問題が潜んでいるといえるかもしれない。作者は意図的にそのよ

うな簡単に答を出せない問題に触れているのである。しかし、いつかは親は自分なりに態度を決めなければならないものでもある。

このように作品を考えてくると、ここに来てこの小説が、作品に馴染とか、規範とかいったものに強制的に合わせようとする世界と、そのようなものから全く解放された自由な世界、或いは好きに河に山に遊ぶといった自然のままの世界があり、むしろ前者の世界に居ながら、後者の世界に憧れる、或いは前者から後者に進んでいこうとするところに成り立っていることが感知できるように思う。

### 《「自由」「自然」の賛歌》

このことは次の家庭教師の場面にさらにはっきり表れている。

天賜はさらに成長し、ますます母親の手に負えなくなる。だが親として教育は受けさせなければならない。そこで、家に家庭教師を呼び、勉強を始めさせることになる。ここでは性格も、方法も全く異なった家庭教師を二人登場させ、自由な世界、自然のままの世界と「教育」との問題が提起されている。

最初の教師は、子供を教えた経験もない、むしろ家庭教師はやりたくないのだが、店を開く資金が欲しくて、天賜の父親から資金援助を得るために、仕方なく家庭教師をやっている人物である。だから当然、彼は強制的に天賜に文章を暗記させたり、鞭で叩いたりせず、天賜のやりたいようにやらせておくという方法を採用。そして時には、この教師は自分の故郷の話、自分の体験談を話して聞かせたりする。もちろんこのような教育をするのであるから、天賜は文章も字もあまり覚えず、所謂教育的効果は上がらない。だが、天賜はこの教師に非常になつく。父親も天賜と同様この家庭教師を気に入るが、母親はこの家庭教師をすぐ見限り、追い出そうとする。

前者の家庭教師が解雇された後、雇われた家庭教師は、以前子供の教育にも携わり、実績もある家庭教師であり、その筋では有名な先生であ

る。つまり、中国の伝統的な、最も普遍的に行われている教育法を行う人物として描き出されているのである。彼は文章を徹底的に暗記させ、それができなければ鞭で打つのである。天賜はこの家庭教師に怯え、反抗する。それを支持する形で、父親が、その家庭教師を追い出すことになる。

ここでも、何もしないで子供の好きなようにさせた家庭教師が、牛家の奥さんからは疎まれるが、牛家の主人や天賜からは却って好意的に迎えられる。一方厳しく教え込もうとした家庭教師は天賜に反抗され、牛家の主人から追い出されることになる。

このように、作者は故意に馴染とか教育というものに不合理なものを含ませることによって、それらに対する疑問を投げかけている。しかも、このストーリーの展開であれば、作者の馴染、教育に対する回答は、まさしく何もしない方がよいということになるのではないか。さらに言えば、子供は「自由」に「自然」のまま育ってくればそれで良いということになろう。だとすれば、作者は少なくともこの作品の前半では読者を笑わせながら「自由」「自然」というものの賛歌を謳っていると言っても良いかも知れない。この結果、天賜は外形的には親からの強力な働きかけによる足の変形とか、寝かされ過ぎによる扁平頭などはあるものの、内面的には母親からの強力な働きかけを拒否する天真爛漫さ、自由さを持った人物に育ち上がっていることになる。これが後半部の自分の嫌いな科目は先生の話も聞かないし、勉強もしないとか、学校に行くより家庭教師を頼んで勉強した方がよいと考える、というところに繋がっていく。

そして、こうであれば当然ながら天賜と母親は訣別することになろう。この事件のあとで、つまり自分の理想とする家庭教師を追い出された牛家の奥さんは以下のように宣言する。

「勉強したかろうがしたくなかろうがしらないよ、騒ぎたかったら好きに騒ぎなさい！勝手にし

なさい、とてもかまいきれないよ！大きくなってつまらない人物になっても、私を恨むんじゃないよ、私は一生懸命心を尽くしたんだからね。」<sup>(15)</sup>

こうして「故意に働きかける愛情」が「何も働きかけない愛情」に敗北することになる。この作品の、このような展開でも解るように、母親の強力な干渉はこの時点でなくなることになる。以後は天賜自身の判断、やり方で生きて行かねばならなくなる。それからが後半であると考えてる。

## 二

### 2) 後半部

後半部では「笑い」が主に天賜に付与されている「想像する」という性格からもたらされていることに注目したい。そうして、まず天賜の「想像」がどんな形で出現し、それはどのような意味を持つのか、或いはそもそも「想像」とは何なのかということを考えてみたい。

後半の部分の考察に入る前に、見通しのようなものを幾らか述べておく。

彼は成長過程において人一倍「想像」に富む人間となっている。「笑い」は、例えば現実と空想の世界の混同、それからもたらされる行為によって引き起こされる。このため天賜が非現実的で、愚かな人物のように見えがちだが、実はそうではないのではないかと。また、天賜が想像力を働かせることによって、そのことがおもしろくなり一生懸命、真剣にやる。その姿が実に「可笑しい」。しかし天賜のその行為が笑われているように見えながら、実は、そのことに含まれている、天賜にそんな行為をさせるものに「笑い」の原因があるのではないかと。また天賜に付与されている「想像」は非現実の象徴のように見えながら、実はそうではないのではないかと。

#### 《「想像」の根底にあるもの》

さて「想像」というのは、時には「空想」、或いは「妄想」に近く、現実から離れた「とんで

もないこと」を考えたり、行ったりすることがある。もし「想像」がこんなものであれば、主人公の「想像」の度が余りに過ぎれば読者から見捨てられてしまう可能性がある。もちろんこの作品の主人公は子供であるから、子供という理由で許されることもあるが、それのみで最後まで読者を作品に繋ぎ止めることは難しい。

しかし結果としては、実際は最後まで確かに天賜を応援してしまうのである。こうしてしまうのは主人公が子供であるという事の他に「想像」が発生してくる根っこのところに在るものに関係があるのではないと思われる。つまりここに作者の、天賜から読者の心を離れまいとする苦心があり、このために我々は最後までこの作品に付き合うことになるのではないかと。まずこのことを考えてみる。

これを知るために、最初に天賜の「想像」が彼の弱点と裏腹にあるものである点に注意したい。例えば泣きたいほど悔しい思いをしたとき、その悔しさ、泣きたい気持ちを昇華させるものとして「想像」は使われるのである。その場面を見てみる。

彼は足が変形しているので速く走ることは出来ない。だから二つのグループに分かれて競争するなどの場面では、どのグループからも敬遠されることになる。

「僕たちのチームには天賜は要らない。彼は駆けられないんだもん！」チームが分けられ、玉を回したり、旗を渡したりする競争では、天賜は傍らで何もせず立っていた。時には彼は承知しなかった。「僕は走れる、僕は走れるよ！」だが、結果は余りに頑張りすぎて自分で足がもつれて転んでしまった。ゆっくり彼は自分が軟弱なんだということを認めて行った。みんな——先生さへもだ！——が勝利した英雄たちに拍手しているのを見て、彼は薄い唇をしっかりと噛んだ。……(略)……彼は心の中が悶々として、一人塚のところに立ちながら、みんなが大騒ぎして叫んでいるのを聞いていた。彼がやることはなかった。彼は

お父さんのやり方を学ばねばならなかった。「それも良いだろう、くそったれー！」当然彼は想像を使って自らを慰めることが出来るし、しかも付随して彼を馬鹿にした人々に反抗することが出来る。「みてろよ、いつか僕には一對の翼が生え、空じゅう飛び回れるんだ。君たちは誰もできないだろう！」しかし翼が生える前に、みんなに軽視された。<sup>(註16)</sup>

この、やる切れないほどの鬱々とした場面では、天賜の「想像力」は自らを慰めるもの、さらには反抗の武器として使われている。

確かに牛家は四つも店を持つ金持ちの家である。だが天賜個人にしてみれば、彼は単なる金持ちの子供とは言えない幾つかの弱点を持っている。そもそも天賜は拾われた子供である。この理由で天賜はお金持ちの家の息子にはなっているが、息子という地位も非常に不安定である。また、彼は肉体的な欠陥を持っている。足は曲がっているし、頭も扁平である。先に見たように足が悪いので運動能力は劣り、仲間はずれにされる。また捨て子だったことも頭の形も他の子供にからかわれる材料になる。このように作品をよくよく見ると彼は弱点を持つ者、虐げられている、弱者の位置に終始置かれていることが分かる。

このような設定が読者に与えている影響は大きい。つまり、この設定で、作者が読者に同情を寄せるようにしているのではないかと思われるのである。このようにすることで読者が天賜を最後まで見捨てないばかりか、果ては天賜を応援してしまう気になるのではないか。もし、天賜が単なる金持ちの坊ちゃん「想像力」を働かす人物であつたとしたら、読者はすぐこの天賜を見捨ててしまう。そうさせないために天賜が弱者であり、虐げられていなければならないのである。時には「想像力」を働かす天賜に哀れさ、悲しさのようなものを感じるのも、作者の、この設定に関係あるのではないか。

こうして、天賜に同情し、彼を応援するよう

にさせられた読者は、彼が引き起こす事件にハラハラしながら最後まで付き合うことになる。

### 《「新主任就任反対運動」の場合の「想像」》

ただし「想像力」を働かせることによって出来上がる世界は、いわば「とんでもない世界」になる可能性がある。天賜が想像した自分の世界の中にいるだけならよいが、想像の世界と現実の世界を混同し、実際にそのつもりで行動するときに「とんでもない」ことが起きてしまう。そしてその結果、時には天賜に悪いように作用する場合がある。

この「想像力」が最も悪い形で作用したのが「新主任就任反対運動」の際の顛末である。そしてこのことによって天賜は小学校を退学させられることになる。

さて、新主任が学校にやって来るというので、反対運動が起こる。この反対運動は先生たちの主動によって起こる。学生が引き起こしたものではない。

先生たちは言った。主任の家は十の商売をしているし、一家には五六人役人になった者がいる。彼はもともとこんな金にならないことはやりたくなかったのだが、教育のため、学生のために犠牲になり、知県を止めて主任になった。このような人を擁護しないというのか？振り返ってみれば、新主任は、貧乏人の息子だ。父親は大工だぞ。大工なんだ。<sup>(註17)</sup>

天賜が通っているのは付属小学校であるから、実はこのような文で付属小学校の体質を皮肉っているのだが、この理由で学校に新主任の就任を阻止しようとする動きが始まる。そして学校に反対運動組織のいろんな係りが決められる。そのうちの探偵係というのものに天賜は配属される。

天賜はこの種の仕事を軽蔑していた。しかしこの緊張した空気が彼の想像力を刺激した。彼は他の人が考えもしない危険と陰謀を考えた。彼は専

ら主任室の外を巡視し、梁の上にこっそり黒い服装をした者が這って暗殺に来るのひどく恐れた。その梁を見れば見るほど、こんなことがあるように思えだした。彼はこっそり小さな紙を裂いて、梅の花の暗号を押し、しかも「犬主任、一刀のもとにやってやる！」と書き、それを主任室の入り口、教員の休息室あたりに、一枚ずつ貼り付けた。そうして一枚持ち報告した。「報告、暗殺者がいます！」先生たちは至るところに「無名帖」を探し出し、全学校の者の顔色が変わった。天賜はたちどころに英雄になった。<sup>(註18)</sup>

天賜は想像し、それに遊び心が加わったのである。もちろん悪気はない。天賜にとっては単なる遊びだからそのように大騒ぎになることがうれしいのである。

大騒ぎの結果、校門に電気を通した鉄線が張られることになる。天賜はますますうれしくなり、ますます興奮する。

校門に果たして鉄線は張られたが、まだ電気は通っていなかった。天賜は竹刀を抱きしめ、正門の内側に立っていた。彼の眼光は四方に注がれ、薄い唇をかみしめ、ひたすら戦いを待っていた。彼は真面目であった。校門を行き交う人は校門の上をしっかり眺めて言った、電気網だ、電気網だ！今回は本当に賑やかだ。このことによって天賜の胸はさらに高鳴り、俠を行い義をなす、本当の黄天覇になった。<sup>(註19)</sup>

例えばドンキホーテが水車小屋に突進したように、天賜もまさしく真剣であり、本気なのである。この種の「笑い」がこの作品の中に取り込まれているのである。

天賜は「新主任就任反対運動」に想像力を働かせ、その運動を自分の遊びにしてしまったのである。しかも彼は本当に自分が想像した世界の主人公に自分自身が成りきっているのであり、真剣なのである。彼が真面目で、真剣だから「可笑的」のである。そして、天賜が「可笑的」行動を取れば取るほど「新主任就任反

対運動」の中に含まれている馬鹿馬鹿しさが読者の前に明らかにされることになる。

もし作品がこのようなものであるとすれば、作品での天賜の役割は、天賜自らが進んでそのような「可笑的」世界にどっぷりと入り込んでいくことによって、あるいは「新主任就任反対運動」の中に「本物でないもの」「わざとらしさ」が入って行く現象を拡大してみせるというものということが出来るかもしれない。

そしてこの運動の結果、一番馬鹿を見るのは実は天賜などのような人物であることを、作者はさらに書き加えることも忘れない。

二日たって、学校に行ってみると、門の外の標語が変わっていた。「革命精神を持つ××主任を歓迎する！」「帝国主義の走狗××主任を打倒せよ！」彼はこの筆跡に見覚えがあった。彼のクラス担任の先生が書いたものだ。正門の傍らには布告が張り出されてあり「……牛天賜……等十名、即刻退学にする」とあった。<sup>(註20)</sup>

天賜は「一人の小学生の最大の恥辱と恐怖は退学ではないだろうか？」<sup>(註21)</sup> というほどの過酷な処分を受けたのである。一方クラス担任は自分たちは小学生を扇動しながら、いつの間にか新主任を迎える側に回り、その担任が、この騒ぎの責任を天賜を含む十数名の学生にとらせるという結末になっている。つまり、ここでは教員の扇動で学生が踊り、教員は何の咎も受けず、かえって一生懸命踊った小学生がすべての責任をとらされるという恐ろしい構図が描き出されているのである。<sup>(註22)</sup>

天賜は、自分が想像で生み出した世界に浸りきり、その中で遊び、夢中になり、醒めたときにはすでに誰もいず、馬鹿を見たことになる。この代償は決して小さくなかった。

こうして「新主任就任反対運動」は決着する。だがこの運動で天賜が退学に処されたことにより、母親は病気がひどくなり、やがて死ぬという過酷な展開になっている。「とんでもないこ

と」をやったことで自分が馬鹿を見ただけではなく、そのことは母親の死の原因にもなっていくのである。

### 《「母の死」と「想像」》

「想像力」を働かすことができない場合もある。天賜は母の死に直面して、それができない。だから母親に優しくできないという。その理由を以下のように述べる。

実際の問題に遭うと、彼はもう想像することができない。目の前のことがとても真実であり明らかであるということで、彼は遊びのように処理できないのである。お母さんが病気になった。事態は極めて厳粛である。こんな場面で、彼はさらにどうしても「それらしく」することができなかった。……（略）……想像の中では彼は厳粛にすることができる。だが真実の中では彼は想像することができない、だから厳粛にすることができないのだ。彼は心からお母さんに優しい言葉を掛けたかった。しかしお母さんは本当に病気になった。どんなふうにもそれらしくして言葉を掛けに行けば良いのだ。それらしくしないとすれば、何を言おうか？（註23）

普段、彼女に対してそれほど懇切に接していない。だが母親は病気になり、しかも死にそうになっているのだから「それらしく」優しく慰めの言葉一つでも掛けてやるべきなのである。それができないのである。「それらしくやる」には幾らか遊び心が必要なわけで、そうやるためには余りも真実であり過ぎるというのである。「らしくやる」というのは「らしく」ということで既にいくらか嘘が含まれている。「らしく」は明らかに真実ではない。嘘っぽくやりたくなければどうしたらよいのか、真実で対処するにはどうしたらよいのか。分からない。だから行動できない。もちろん天賜がこのように考えたのは、作者が天賜の悲しみ彼に対する衝撃の大きさ、それからもたらされる動揺を表現するためであるが、この部分には人間の微妙な心理、その心

理と、外に表われる態度や言動との複雑な関わり合いが見事に表出されている。確かにこのような場面では誰しも「らしく」出来ないのである。

これに反して、母親の葬式の際には一変する。天賜は大いに「想像」を働かすことになる。こうして葬式が遊びのように見えてくる。葬式が実は死んだ人を悲しむのではないように天賜に思えてくるのである。

「送三」の日になって、彼は又想像することができるようになった。家の中は大騒ぎで、すでに葬式のようなのではなく、みんな遊んでいた。家に入るとたちどころに泣いて遊び、その後食べて遊んでいた。母が棺桶の中で一言も発しない以外には、その他の人はみな話が無くても話題を捜して話し、笑いたくなくても無理に笑い、彼らの泣きと笑いは区別がなかった。……（略）……天賜は棺の前に跪いていたが、聞いていて、見ていて、嗅いでいて、彼はもう母のことを思うことができなくなり、もう悲しむことができなくなり、彼は笑いたくなかった。これはおもしろい。……（略）……人は時期が来たら死んで、みんなを遊ばせるべきである。彼は自分は一度死んで、棺桶に腹這いになり、小さな穴をあけ、外でみんながどんなふうにいるか見てやろうと思いついた。或いは母もこんなふうではないだろうか。もしかしたら棺桶を叩いて、「お茶を持ってきてくれ」と言うかも知れない。彼は怖くなってきた。想像は彼をさらに切実に怖がらせた。というのは想像は事実よりさらに複雑で一定の効果があるからである。彼は遊びに行くべきである。ここに跪いている何の意義も見いだせなかった。彼は背に剣を背負い数人の和尚を殺すべきである。まず肥ったやつを殺す、血がたくさん出るだろう。（註24）

葬式を遊びとして捉え始めている。そうして想像がしだいに膨らんで行き始める。そうすることで、葬式という儀式に含まれる、どうしようもない一種の「嘘っぽさ」を描き出したものということもできるかもしれない。

このように作品を見てくると天賜の「想像」というものが如何なるものであるかが、幾らか明らかになったような気がする。天賜はあるものを見たり、あることに触れたりすることによって、その中におもしろそうなものを見つける、或いはそれを感じることが出来る、それがまさしく「想像」をそそのものといえるのだろうか、そうすれば「想像」を巡らし、目の前のものは、彼の頭の中ではたちまちおもしろいもの、遊びの世界に変わってしまうのである。そうすると彼はその世界の中に入っていく、遊びの世界で自分自身も活動し始める。「遊び」なのだから「それらしく」振る舞うことには抵抗は感じない。

そうして埋葬の日には、「遊び」の中で天賜は「それらしく」自分の役割を演じきるのである。そしてそのあと「遊び」の世界から醒めることになる。

最も威厳のあるのは天賜だった。彼は跡継ぎであり、後ろには四人の小雷公を従えた。四虎子が彼を支え、あらゆる人の視線のもと、彼は死んだ人が誰であるか忘れ、ただ自分の身分を覚えていた。彼は泣き、ゆっくり歩き、頭を低く垂れ、棺の前に置かれているテーブルに向かって御礼を述べた。彼は非常に厳粛だった、というのはこのことが遊びだったからである。彼は道の傍らにいる人が言っているのを聞いた、「ごらん、あの跡取り息子、まるで大人みたいだね！」を。それを聞き彼はさらに真面目な顔つきをした。母親を埋葬し、みんなが帰った後、彼はやっと醒めた。「お母さんが土の中に入った！」彼は真から声をあげて泣いた。<sup>(註25)</sup>

しかし、作者は、この、天賜の「想像力」を決して負の要素と捉えていないのではないか。ここで挙がっている「それらしく」振る舞うという問題にしろ、実は人間社会では、このことを要求されることがしばしばあるのではないか。ただ成長過程では、この点に違和感を抱くことも又事実である。また、このストーリーの

展開から、少なくとも「想像力」を働かせるには、遊び心を感じる「心の余裕」というか、「ゆとり」というかそんなものが必要であることも読みとれる。

### 《「想像」の力》

作者は天賜の「想像」を必ずしも非現実的なものとして退りぞけてない。むしろ「想像」を働かせることで、夢中になり、それから生み出される素晴らしいものがあると考えているのではないか。とくに、天賜が学校に行って勉強するより家庭教師を雇って勉強する方が自分に適していると考え、父親に頼んで、家で勉強することにする。その家庭教師としてやって来る趙という人物との出会い以後には、そのような描き方があるような気がする。

まず趙先生は以下のように紹介される。

この先生は大学を卒業しており、しっかり勉強し、詩が作れるが、仕事が無く、ひどく貧乏だった。趙先生は学校で何回か教えたがことごとく失敗した。彼が学生をかまわなかったからだ。彼の頭はどんなふうに着ったのか知らないが、まるでタマネギのようであった。頭のとっぺんには数本毛が立っていたが、天賜を上手に教育した。<sup>(註26)</sup>

貧相な人物として、作品に登場してくる趙という人物は教育の仕方も変わっている。以下が彼の教育のやり方である。

彼は天賜に言った。君が読みたいものを読みなさい。分からないところは質問しなさい。でも質問しなくてもかまわない。天賜はとても喜んでこんなふうにした。毎日「思想」と名付けた時間があり、先生と生徒が向かい合い何も言わず、各自心の中のことを考える。考え終わったら討論する。思い浮かばなかったら打ち切る。<sup>(註27)</sup>

この教育法は一読しただけで天賜の「想像力」という特徴をさらに伸ばすものであることがわかる。しかもこの「想像力」はあらゆる可能性

を含んでいることも示され、これが特に文芸の分野に生かされれば、素晴らしい文章や詩を生み出すことができることを暗示する。天賜の場合には、すでに卓抜な「想像力」がある。このことからすれば「先生は天賜の天分を褒めそやした」<sup>(註28)</sup>とか「趙先生は笑って言った『三年の期間があれば、彼は何でも創作できますよ』と」<sup>(註29)</sup>という言葉が出てくることも十分頷ける。趙先生は少なくとも天賜の才能を見抜いていると考えられる。

実際に作者は作品で、趙先生が彼に替わって天津の新聞社に投稿した文章が新聞の文芸欄に掲載されるという事実を描き入れている。

とりわけ彼を喜ばせたのは彼の、一編の論文だった。趙先生が天津のある新聞社に投稿し、なんとそれが新聞に掲載され、新聞社から三銭のお金を送ってきた。自分の名前が新聞に印刷されているのを見て、彼は身体が震えた。<sup>(註30)</sup>

しかし、天賜はこの新聞掲載に有頂天になることはなかった。自分の書いた文章がどんな意味があるのか。剣豪小説とは違うけれど、人が喜んで読まないものであれば、意味がないのではないかと考える。現実的な意味、効用がないのであれば、むしろお金の方がまだ意味があることを考えるという点で、趙先生との相違を明らかにする。天賜が趙先生に較べて幾らか現実的といえる。文学観の相違でみれば、趙先生が純文学を支持するという側だとすれば、天賜は通俗的なものを混在させても多くの人々に喜んで読まれる方がよい考えている。

#### 『想像』と現実

さらにお金に対する考えという点で趙先生との違いを見てみる。お金というのは最も現実的なものだからである。

父さんと十六里鋪からお金の凄さというものを知ったし、先生からお金に反抗する方法を得た。わざとお金に冗談をするのである。お金は当

然良いものであるが、先生の方法はその傲慢さを失わせることが出来る。本を買わなければいけないのをあくまでタバコを買う。鼻でお金に向かってフンとやる。<sup>(註31)</sup>

またお父さんが商売で損をしてると先生に言えば、次のように言う。

これは僕たちとなんの関係があるのだ？ 関係ないばかりか、さらには商業精神の死を祝うべきである。酒をついでこれを祝おう。<sup>(註32)</sup>

趙先生は商人を軽視し、お金を軽蔑する。にもかかわらずお金が無くなると、牛家のものを持ち出し勝手に売りさばくということもする。

決定的な趙先生との違いは趙先生との別れで鮮明になる。趙先生が小説を出版して二百五十元のお金を手に入れる。趙先生と一緒に上海に行かないかと天賜を誘う。「上海」と聞いて心は動くが、最後には彼は行かないことに決める。

さらに彼を恥ずかしがらせたのは彼がこれはこれ、あれはあれとはっきりけじめをつけることに由るものであった。誰のものは誰かのものなのだ。これは母親の教訓だった。彼は先生と一緒に行って、先生のお金を絶対に使ってはいけないのである。先生がもし彼のお金を使っても何も悪いことはない、彼は結局先生より裕福なのだから、たとえ彼は自分の手にお金がなくなっても。彼は先生に首を振った。<sup>(註33)</sup>

天賜は商人の父親を助けたいと思っているし、他人のものを自分のもののように使うことをしないけじめを持っている。このような考え方、態度は、天賜の文学観にも影響を与えているはずで、つまりこのような点でも趙先生の文学とは違うということである。趙先生の文学とは違う、もっと現実的なところに足を下ろした天賜独自の文学に向かう可能性を示唆するものだと考えることもできる。

以後、天賜は学生たちの運動に触発され彼らのために詩を書いたり、詩社に加わり、いわゆる古い文人たちの好む古典詩を作ったりする。これらは天賜の文学遍歴というふうに捉えることが出来よう。天賜も学生たちの運動、詩社の人々の創作物や態度に「遊び心」をそそられるが、戦争、商売の不調、家の没落、あるいは父親の死という現実と直面した時、それらの文学活動の、どうしようもない無力、欠陥というものを思い知らされることになる。

### 《「想像」の勝利》

父親の死で家を手放さなければならなくなり、貧乏長屋に引っ越しをし、天賜は露天商で身を立てなければならなくなる。

しかし紆余曲折の後、天賜は長屋の人々を理解し、そして商売にも精を出すようになる。端午の節句の、天賜の商売ぶりを以下のように描き出す。

商売は確かに悪くない。天賜は嬉しくなってきた。書物を置き、一日中露天に釘付けになった。彼の顔色は良くなり、ご飯もおいしくなり、力も出てきた。彼は自分に本当の能力があると感じた。……（略）……街中が商売の雰囲気になった。お金の錆や肉の脂っこい臭いが空中に滞っていた。この空気の中で天賜は一切を忘れ、ただ商売のことだけを考えていた。みんながどんなふうにならるか、天賜はそれに従って売り声を上げることができた。頭には汗が浮かび、腰までの単衣はボタンがはずれ、手や腕の上でめちゃくちゃになり、すべて黒い桑の実の汁が着いていたし、鼻の上には蠅がとまっていた。彼はいろんな声色格好で商売を行っていた。受け取った小銭の札は腰帯に挟み、銅銭はカシャリカシャリと籠の中に投げ込み、口ではガムを噛んでいた。わずかに暇があると、茶瓶の口から水を一息にのみ、手を腰にあて、かん高い声をあげた。「こっちはみな安いよ！ 白黒の桑の実はどうだい、大きなサクランボもあるよ！」<sup>(註34)</sup>

この場面での天賜はすでに金持ちの坊ちゃん

というより寧ろ極めて能力のある露天商である。ということは実際の生活においても彼は十分に生きていける能力を獲得した、あるいはそのような能力があることを証明したということになるのではないか。

もちろん、この商売のうまさを、天賜の想像力、遊び心の方から説明することもできる。露天の商売の中に遊び心をそそられるものを見出し、彼は露天の商売に夢中になっていると考えるのである。しかしそれにしても、そこにはひ弱さはなく、寧ろたくましい天賜の姿を見出せる。

もちろん動揺はある。かつて慕っていた女性に自分が露天商売をしているところを見られショックを受けたりもするのである。

しかし、このようなときに、以前の自分の家庭教師であった人物が現れ、天賜をこの境遇から救い出す。その家庭教師であった人物は天賜の父親から一千元借りて商売をし、それが成功し、今は金持ち成っていたのである。

彼の尽力で、天賜は北京で学校に行くことになり、自分の育った土地を離れていくことになる。そして最後にエピローグとして「彼が後に名を成した」<sup>(註35)</sup>と書かれて作品は終わる。

### おわりに

「はじめに」にも書いたように、この作品は長篇小説の発表順からいえば『離婚』と『駱駝祥子』の間に位置している。この前後の作品の評価が高いのに較べると些か影が薄いように思える。この理由は幾つか考えられなくもない。例えば『離婚』『駱駝祥子』の両作品には現実社会との戦いのようなものが描き出されている。現実是不合理的な暗黒の社会でありながら、その社会をどうにもできず、却ってその暗黒の中に引きづり込まれる不安、その際の苦悩のようなものが作品の中にある。この『牛天賜伝』は一人の人間の成長過程というストーリーの展開の中で紆余曲折はあるものの最後には立派な人物に

なっていくことになる。この『牛天賜伝』にも苦悩は表現されているが、その程度、深さという点で『離婚』『駱駝祥子』に幾らか劣るのではないか。これが作品の印象を些か弱くしているとも考えられる。さらにもう一つは、この作品が「自然」「自由」な生き方への強い希求、物語の世界での実現の試みということと「想像力」という不思議なもののおもしろさや重要性の表現という、他の二作に比べて幾らか抽象的なものを扱っていることに依るのではないか。

このことはそのまま『牛天賜伝』の特徴であり、その特徴から、この時期の老舍が「ユーモア」というものに何を込め、何を期待しているのかまで窺い知ることが出来るような気がする。この作品は非常に良くできているし、扱っていることも非常におもしろい。しかもここに描き出されていることは普遍的なものだけに今日でも充分意味のあるものであると考える。ただ残念ながら、こういうものを展開する条件が当時の中国の現状、それに続く中国になかったのではないか。このことが冒頭で引用した、作者の文章にも窺われるように思える。つまりこの『牛天賜伝』以後、冒頭の引用文を書くまでの、どの時期かに、読者を大笑いさせながら実に巧みに主題を折り込み、人間、人生を考えさせる創作方法の方向転換がなされたのではないかと思われるのである。

今回の分析でやり残したことも多々ある。例えば四虎子の存在にはほとんど触れてない。作品では彼の存在も決して小さくはない。この作品の「痛快」な部分はほとんど彼が関係している。それ故、当然作品全体に関わってくる意味も大きいはずである。また、この作品に描き出されている貧しい田舎のことに触れていない。なぜこの作品に、あの田舎が必要だったのか。また次の機会に改めて考えてみたい。（完）

## 注

『牛天賜伝』のテキストとして『老舍文集二』のもの

を使用した。さらにこの作品は、最近出版されたもので『老舍小説全集4』（長江文芸出版社・1993年11月出版）、『老舍小説経典第3巻』（回顧中外大師叢書九州図書出版社・1995年6月出版）にも収録されている。

- (1) 『論語』には第49期（1934年9月）～第74期（1935年10月）に掲載された。
- (2) この雑誌が「ユーモア」を提唱していることは、論語第3期の「我々の態度」と題する文音に窺うことが出来るのではないか。冒頭を少し引いておく。「論語半月刊以提倡幽默文字爲主要目標、很引起外間的誤會、猶如幽默自身引起國人的誤會。這種的誤會、我們早就料到、而已由收到的外稿證明。有人認爲這是專載遊戲文字、啓青年輕浮叫囂之風、專做挖苦冷笑損人而不利己的文字。」彼らがどのようなものを追求したのかということは、又別の機会に考えるとして、この雑誌が「ユーモア」に関わっていることは明らかになったと思う。
- (3) 「我怎样写《牛天賜传》」（原载1936年8月1日《宇宙风》）『老舍研究資料（上）』（北京十月文艺出版社）より
- (4) これは出版状況を見ると理解出来るのではないか。またこの作品には他の作家、趙少侯と共同で『天賜代存』という書名で『牛天賜伝』の続編を作ろうとしていたという事実もある。なお出版状況は以下の通りである。  
上海 人間書店 1936年初版、1937年7月3版、1940年12月  
上海 中国科学公司 1937年  
成都 群益出版社 1943年  
重慶 文 出版社 1945年6月初版  
新豊出版公司 1946年2月初版、1947年2月再版  
上海 晨光 1948年3月初版、1949年1月再版  
『首都図書館編 老舍研究資料編目 北京市図書館学会』（采華書店）に依る。
- (5) 拙稿「老舍『趙子曰』試論」（八戸工業大学紀要第9）p.188
- (6) 作品を前半と後半を二分する作品の書き方は最も顕著な例として『小坡の生日』がある。すべての長篇小説には基本的にこの傾向があるような気がする。このような創作方法は、さらに短編にもあり、老舍の一つの特徴といえるかも知れない。もっと考えてみたい。
- (7) 『牛天賜伝』p.381
- (8) 『牛天賜伝』p.394
- (9) 同上
- (10) 『牛天賜伝』p.400
- (11) この種の、いわば伝統的な文化の歪みに対する諷刺は、最初の長編小説『老張の哲学』（1926）に始まっている。詳しくは拙論「老舍『老張の哲学』私論」（『集刊東洋学』57号・1987年）を

- 参照して頂きたい。
- (12) 『牛天賜伝』 p. 403
  - (13) 『牛天賜伝』 p. 404
  - (14) 『牛天賜伝』 p. 423～p. 424
  - (15) 『牛天賜伝』 p. 448
  - (16) 『牛天賜伝』 p. 453
  - (17) 『牛天賜伝』 p. 472
  - (18) 『牛天賜伝』 p. 472
  - (19) 『牛天賜伝』 p. 473～p. 474
  - (20) 『牛天賜伝』 p. 474
  - (21) 『牛天賜伝』 p. 475
  - (22) 「運動」と称するもの捉え方は、処女である短編小説『小鈴児』（1923年）から一貫している。この小説でも主人公は先生に影響され「運動」のようなものを作り、最後に主人公の小学生が退学させられるという筋立てになっている。
  - (23) 『牛天賜伝』 p. 478～p. 479
  - (24) 『牛天賜伝』 p. 481～p. 482
  - (25) 『牛天賜伝』 p. 488
  - (26) 『牛天賜伝』 p. 500
  - (27) 『牛天賜伝』 p. 500
  - (28) 『牛天賜伝』 p. 502
  - (29) 同上
  - (30) 『牛天賜伝』 p. 507
  - (31) 『牛天賜伝』 p. 504
  - (32) 『牛天賜伝』 p. 507
  - (33) 『牛天賜伝』 p. 509
  - (34) 『牛天賜伝』 p. 538
  - (35) 『牛天賜伝』 p. 545